
呼ぶ名前は何処に……

黒戯楼雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呼ぶ名前は何処に……

【Nコード】

N8388C

【作者名】

黒戯楼雅

【あらすじ】

旅人と歌姫の続編（アナザー編）ですあの仕事から約四ヵ月後、アナザーは巫八手鬼姉妹に呼び出され話をしている所から始まる。アナザーがどのような奴か分かる話なので前回読んだ事がある方はぜひ読んでみてください、

第一話（前書き）

これを読む前に旅人と歌姫を読んだ方が良いかもしれません……
読まなくても多分理解できると思います。

第一話

雇主、アイツが俺を壊した。
ぶち壊しやがった……

「……聞いているの？」

「……ああ聞いている……」

「ほんとに聞いているの？ お姉様の話を聞かないと痛い目見るのは
アナザー、貴方なのよ？」

酒の入ってるグラスを傾けている俺に話しかけるのは夜影女郎蜘蛛
という異名を持つ巫八手鬼姉妹だ。

姉は巫八手鬼維織、妹は巫八手鬼紫織

という、二人の容貌は男を寄せ付けるような妖艶さがある。

しかし二人は双子なのだ。

二卵性双生児なのだろう、それならば似ていないのも分かる。

維織は冷たさの塊、紫織は温かさの塊とでも言えばいいか……

正反対だ、全てが全て、しかし反対なはずなのに

二人の間には姉妹愛という名のものががちりと結び付いてある。

「お姉様、主様が呼んでるわ」

「……主殿にでも言うておくとしよう、覚悟はしておいた方がいい
ぞ？」

姉妹は俺に背中を向けて去っていった。

俺だけが取り残された空間から聞こえるのは古めかしいラジオから
流れる弦楽器の

アンサンブル曲。

変わることをない時間を俺は憎んでいる、あの時もしも俺があんな
選択さえ

しなければ……

時間は待つてはくれない、それは昔のある出来事で分かっている
あの出来事がなければ、俺は普通に暮らせていた……

「アンタ……何か、大切なものを忘れてきたのかい？」

初老の男がゆっくりとした口調で淡々と俺に問いかける。

俺は苦笑いしながらこう答えた。

「大きいものを落っことしてきちゃった……とつても大切なものを
ね」

「それは……アンタ自身が背負わないといけないもんじゃないのか
ね？」

そんなのは分かっているんだ、背負わなきゃならない物なんて
幾らでもあること……ナニのために生きてきたか

そんなのは分かっているんだ……あんな事さえしなければ……

俺は金をカウンターに置き店を出る、ジャケットと長剣を抱えて出
たはいいがこれから

何をすればいいか、どこをどうしたらよいかなんて分からない
ただただ黙って人を殺す事しか許されない

ゆっくり歩いて周りを見回す、もう夜も更けてきた。

「おい……出でこいよ俺を殺しに来たのか？」

いつの間にか町外れの薄暗い廃墟の連なっている場所にいた

「……早く出てこい……俺は今虫の居所が悪いんだ……」

殺気の含んだ声で俺は誰もいないはずの空間へ声をかける、すると
暗闇の中から出てきたのは複数の青年や少女たちだった、手にはナ
イフや銃、

ナックルなどを持って、すぐにでも仕掛けられるようにしていた。

「こんな時間まで何をやってるんだ？」

「何をやってるって……見れば分からない？」

「分からんな、何がしたい、早く親の元へ帰れ」

青年は俺が抱えている長剣を指差しへらへらと笑う

「ソレ、ソレを俺らにくない？」

「やめとけ、おめえらには手の余るもんだ」

「なあに、使わないよ、売るだけ」

少年はにっこりと微笑み、

左手を差し出す。

俺はもう一度言った。

「親が心配してんだろ、早く帰れ」

俺の近くに居る青年以外の子供たちはざわめいた、

そして青年は呟く

「俺らには親なんて居ないんだよ……」

「はあ？ どういう事だよ」

「そのまんまの意味だよ、アナザーさん」

「！ ！ なぜ名前を知っている……」

「さあ？ 何でだろうね」

相変わらず笑顔で答える青年、

巫八手鬼姉妹に雇われたのか、それ以外には考えられないがな……

（なーんだ……あいつ等も少しは気づいてたか……）

俺は少し苦笑いをした。

（紅き、赤き、紅き、紅蓮の炎の衣を纏い、我ここに彼の者たちを一掃せん……）

この言葉が長剣^{アトロイ}を覚醒させる言葉、

剣を覚醒させないと剣に飲まれてしまう、簡単に言うとな剣に乗っ取られる。

そして、この剣を覚醒させた時の俺の記憶は消えてなくなってしまう……

第二話

やはり記憶は無い
何をしたか

ただただ体が重くて
堪らなく眠いのだけが分かる。

「つつ……頭がガンガンしやがる……」

酒のせいなのか、アトロイのせいなのか、

そこら辺はよく分からないが兎に角頭が痛い、

「まったく……お前にはいつも迷惑を掛けさせられるな」

「……ヴェルドか？……」

アトロイは俺が抱えていたが、コートが無い。眼鏡も無い、

「俺だったら悪いか？」

やっぱりそうだ、この耳障りな声をしているのはヴェルドぐらいしか居ない

「いいや……頼む、俺のコートを持ってきてくれないか？」

「はぁ？俺はお前のパシリじゃないんだぞ？」

「兎に角よろしくな、」

「おま……ぜってーやだからな！！」

「頼むって、いい加減体も追いつかなくなってきてるしよ……」

「そしたらそれ使えなよ……お前の面倒を見るのなんて御免なんだよ」

汚いようなものを見る目でヴェルドはアトロイを睨む

「……ルオナ、悲しむだろーなー」

ルオナというのはヴェルドの妹の事で、何かと苦勞を掛けさせてし

まっている。

「うゝっ……わかったよ!! 持ってきてやるよ!!」

にやりと笑い、手をひらひらと振り、いってらっしゃーいと嫌味を言うような感じで

ヴェルドに言葉をかけた。

この剣を使って何年経つんだろうか

よく覚えていないが、コイツと初めて対面したのは結構前だったよ
うな気がした。

ただなんとなく、雇主に拾われて、ただなんとなく仕事をして
そして俺はコイツに出会った。

ただただアイツが愛おしくて

アイツを意識しすぎて……

剣を手にとって、俺は多くの罪無き人間を殺して……

何でだろう……

あの剣をなぜ俺は手に取ったのだろう……

考えれば考えるほど、俺の中の罪は増えてゆく一方

ただ……アイツと一緒に居れるだけでよかった……

けど……今のこの状況からして、こんなことを考えている暇なんて
無い……

雇主をどうにかしなければならぬ、

俺がこんなところでうだうだやってる暇なんて無い

俺は……必ず雇主を殺す……絶対に……

「そんなこんなでこの有り様か……全く、俺も年取ったな」

昔はこんなのじゃなかった。って言ったとしてもそれは昔の事、
今更一手も遅い事だ、

「はあ、はあ、はあ……おら、取って来てやったぞ……」

息切れしながらやって来たヴェルドからコートを受け取り……とい
うか

投げつけられたのでキャッチ、懷から眼鏡を取り出し装着する。
何も見えないわけではないが、無かったら無かったで困る代物、

「悪かったな、迷惑掛けて」

「……明日は雹が振るぞ……」

ボソリと呟くヴェルドに聞く、

「そんなに俺が礼を言うのは珍しいか？」

するとヴェルドは間髪入れずに頷き、ニコリと微笑む、

「なんなんたり前じゃん♪俺のことは、“屑”か“ゴミ”か“ゴキブリ”か“糞野郎”って呼ぶしな」

「ん？なんだ？そしたらヴェルドって普通に呼んでやるか？」

「……キモチワルイ……」

「……失礼なヤツだな……お前って」

俺は苦笑いをし、立ち上がる。

「お、雇主の所にでも行くのか？」

「いや、墓参りに行くよ」

「誰のだよ」

「リーリアの墓参りだ、悪いか？」

「……氣いつけろや、あの二人もお前を狙ってるからな」

「はいはい、んじゃな」

「おう、じゃな」

そんなそっけない会話を交わせるのもヴェルドぐらいだ、

俺は墓場に行く事にした。

コートを着て歩く、

空は明るく、冷たい空気が肺の中に入ってきているのが分かる。

（さて行くか、アイツの元に……ジェムの事を伝えねーとな）
一歩ずつ歩みを進める。

今は何も考えるな、自分の罪よりも今やる事に集中しなければ……
そう、何も考えなければいい……

俺は歩く、最愛の妻、リーリアの埋まっている場所へと……

第三話

ただただ続く草原、そこにポツリとある墓標

“ 双眸の輝き、春の季 ”

リーリア・ストルトーズ、ここに眠る

この下に、リーリアは眠っている。
助けられなかった俺の妻が眠っている、

「遅くなってすまん」

「……」

「ジェムは元気にやってるよ、お前はどうか？」

「……」

「……すまない……」

「……」

俺は何をやっているんだか……喋りもしない墓標に話しかけて
答えを求めるなんて……

「なあ、お前がもしも生きてたら俺って変わってたと思うか？」

「……」

「……なあ……なんでお前は俺について来たんだ、なんで俺の傍で

笑ってくれたんだ」

「……」

「……ほら、花、お前結構好きだろ」

そう言っただけは持っていた花束を墓標の前に供え、苦笑いを浮かべる事しか出来なかった。

俺に出来る事はそんな事しかない

微笑むアイツを見て、癒され、抱きしめる事が出来た。

昔の俺は幸せだったんだ、

アイツを守れなかった、そんな言葉に縛られ生きて、

偶然であつたジェム、

何でこんな偶然を神は導いたのだ、ただただ人を殺し生きてゆく俺に息子を引き合わせたのだろうか

誰も分かるはずが無い

分かる者がいるのなら教えて欲しい、なんでもするから、分かる者がいるのなら……

(ねえ、アナザーは何でいつも悲しい詩しか口にしないの?)

アイツの口癖、確かに俺はたまに詩を口ずさむ

アイツにせがまれ何度か読んだ事もあった。

せがんだアイツの口癖、

何度も何度もせがまれた……

「悲しみと共に堕とされ

私の近くで死神は微笑み

罪を背負う私に貴方は死の鎌を振り翳す

微笑みすらも死の輝き

貴方の束縛を私は喜んで受けよう

貴方が望むなら貴方が望むなら

私は貴方を守りましょう――」

なぜか読んでいた。

アイツのためにだろうか、

よく分からないがなぜか読んでいた

第四話（前書き）

今回はエロい表現が出てきているので注意して呼んで下さい

第四話

それは哀しいほど哀れな世界

それは色あせた……そんなつまらない世界

私はここで生まれて主殿に拾われた

私は……妹……紫織を憎んでいる……

「ねえ、お姉様あゝ」

「……」

今は好きだ、憎んでいないといえば嘘になるが
憎しみが次第に薄れていつているのが分かる。

しかし憎しみは未だに存在する。

「？ お姉様？」

（私はどうしたいんだ……）

何もかも信じられない世界に堕されて、生き行く糧すらも無い

この世界に堕された私は本当に生きていても良いのかも疑われる。

「……」

そう、両親に愛された紫織に何が分かるのか、

まったく愛されなかった私の何が分かるのか……

どんな愛でも良かった、なぜ私じゃないのか……

私が九つの頃だ、何かが軋んでいる音で起きた。

昔の私は紫織の方を向いて寝る癖があった、

目を開く、本当は開かない方がよかったのに……

あの頃の私はその行為がどんなものかなんて分からない、

ただ父と紫織が一緒のベッドに入って何かをしているのは見えた。

「……や……あ……もおやめてえ……おとうさん……」

「なんだ……って……？　これをしてくれと……頼んだのはお前……だぞ」

暗くてよく分からない、見えなかった。けど窓から月明かりが入ってきて……

父の顔を見た……飢えた獣のような目、腰を激しく動かし紫織を突いていた。

「や……やめてえ……お……ねえちゃ……ん……」

紫織は泣いてた。

「たすけ……て……」

息苦しそうに私を呼んだ。

「……」

私は黙って見ている事しか出来なかった。

ベッドの中で泣く事しか出来ない自分が憎い

どんな愛でも良かった……

ただ愛して欲しかった……

なのになんで……

「ねえおとうさん……今日は……駄目？」

いつからか紫織が父の耳元で呟く声を盗み聞きするのが習慣になってしまった。

愛し合っている現場なんて見たくもないから、だから話を盗み聞い

た。

そしていつの間にか私は外に出て人について考えた、
生きている私たちにとって愛とは何か、私自体生きていても良いのか
全て分からなくなっていた。

何でもここまでして私は愛されようとしていたのかも分からなかった
だから私は……初めて人を殺め、微笑む、
こんな下らない生き物なんていなくていいと思った。

「ねえ母さん、なんで私を愛してくれなかったの」
涙が溢れる

ぼろぼろと、けど哀しくなかった。

手の爪を剥ぎ、指を折り、切れにくい刃物で指を刻み、
腕も折った、折った場所を力を込めて握り笑顔でこういう

「母さん、私のことを愛してる？」

「私はね、母さんに愛されたかったの……分かる？」

笑顔で母さんを痛めつける、

とても満たされた気がした。

そして私は母さんの首を刎ねた。

血塗れになって私は呟いた……

「母さん、私今とても幸せだよ」

廃墟の屋根に座っていた“あの人”

血塗れの私をみて“あの人”は私に話掛ける

「とっても綺麗だね、血塗れの天使みたいだ」

私はとても嬉しかった。

「キミは力が欲しいんだね……いいよ、あげるよ……その代わり……

……」

「僕の傍にいてくれないかい？」

確かに力が欲しかった、けどそれ以上に誰かの傍に居る事ができる
ということが嬉しかったんだと思う、

「……私を……私でいいんでしょうか？」

「キミじゃないと嫌なんだよ」

私は頷く、

すると“あの人”は屋根から飛び降り、私の目の前にやってきた。
そして唇を重ねるだけのキスをする。

私は流石に驚きを隠せず“あの人”を突き飛ばした。

「ごめんね……けどこうしないと力を君にあげられなかったんだ」

「……すみません……」

“あの人”はにっこり微笑みこいう

「君の力は“声”君の声はこの世の快樂の全てを持っている。キミ
のその声で人はキミに服従するだろう」

「……え」

「キミの声で世界の人間すべてを支配する事が出来る。キミの歌を
聴くととても気持ちよくなる。そしてキミのためなら何でも差し出
そうとするんだ。早く言うとう君の奴隷になりたがる」

「……」

「人々をキミの玩具に出来る。それはとても楽しい事だろう、けど
僕はキミの声に影響を受け無いようになってる」

「……そしたら……」

「キミは僕の右腕、」

「右腕……」

「僕を支えて、僕を崇めてくれ」

「……分かりました」

私は“あの人”を愛したいと思ったがそれは不可能だと思った……
いいや本能がそうさせなかったのだ

「キミは僕のものだ……ハハハッ……」

父は死んだ、私の可愛い奴隷達が殺してくれた。

私は“あの人”のために働く、人形なんだと自覚するのはそう遅く
なかった、

私は今も“あの人”のために働く、

私は貴方のために動いています、

私は貴方の望む事を叶えていますか？

だから貴方は私を愛してください

私は貴方だけを見て生きてゆくから……

第五話

雨が止んだのは俺が泣き止んだ後、月が沈み太陽が出てきたときだった。

「……なありーリア、お前は何をしたかったんだ？」

雨の染み込んだジャケットが俺の気分まで暗くする

「……」

何も喋らない墓石に俺はもたれ掛かる。泣いていた時の俺はだらしなく

涎を垂らしてたんだろう、そう思うとなぜか馬鹿馬鹿しくなってくるものだ。

「……お前は何を望んだんだ」

「それは貴方の望んだものを望んだのでは？」

「……いつからそこに居た……グロッド」

「雨が止んだ辺りですかね……」

「みつともないですね、貴方らしくない」

「悪かったな」

グロッドと言われた青年は微笑む。そして俺に手を差し出すが俺は手を取らず立ち上がる

「つれないですね」

「お前が嫌いなだけだ」

「貴方は何で彼の元にいるんですか？」

一瞬間が止まった。俺はアレを人と呼ぶ人間がいたとは思えなかった……

「……アレは人じゃない……彼と呼ぶのはおかしいぞ」

「彼は人です」

「アレは人じゃない、もう一度言うぞ、アレは人ではない」
グロッドの碧い瞳が少しだけきつくなる。

「貴方は分かってない、なぜ彼の能力を認めないんですか」

「お前は本当のアレを知らないから言えるんだ」

「彼は素晴らしい、あの能力を僕は欲しいんですよ」

狂ってる、この青年は絶対に狂っている。

人でもないものを殺し、その力を手にしようとしているのだ

「あの力を手に入れるには彼の骸が必要、彼を殺さなければなら
いんです……とっても惜しいですが……ね……だから貴方のその剣
が必要なんですよ……」

繰り返される生と死の繰り返し、俺が罪無き人を殺め、雇主がそれ
を見て楽しむ

そののどこが楽しいのか、アレの能力のどこがすばらしいのだろうか
俺にはわからない
分かるはずが無い

「聴いてますか？」

「……」

「聴いてるってことにしておきますね……じゃあ覚悟してください」
「どうして分からない、アレはお前には殺せない、アレの力に呑ま
れてしまうだけだ」

忠告してもどうせグロッドは聴く耳を持たないのは当たり前だ、子
供が駄々をこねているのと同じで

欲しい物があると絶対に手に入れる、それを手に入れるためなら何
でもする奴だ

「僕は貴方の剣を手に入れて彼の力を手に入れる……だから大人し
く死んでください」

「……糞餓鬼が……」

本当は嫌だ、子供を殺すのは嫌だ……ジエムを思い出す……

「僕は子供じゃないです、貴方の子供と一緒にしてほしくくないです、

」

「それを言ってるお前に怖気が走るっての……」

グロッドの武器は折りたたみ可能な斧、俺のアトロイに比べかなり重い。それを軽々と振り回す。あまり相手にしたくない奴の第一候補だ。

腰辺りに手を回し、折りたたんでいる斧を取り出し組み立てる。

「本気でいきますね……後悔しないでください」

「……紅き、赤き、紅き、紅蓮の炎の衣を纏い、我ここに彼の者たちを一掃せん……」

意識が遠のく、そして俺を支配する。

……だが今回は違った……周りをすることが出来る……

「アトロイだっけ？ 僕の邪魔をしないですんなりその持ち主を殺させてね？」

「……オマエハワカッテナイ、ナゼコノオトコノコトヲリカイシヨウトシナイノダ」

「キミ喋れるんだ……けどそんなのは気にしないけどね」

俺は大きく剣を振る。それをグロッドはかわし間合いを狭め腹部に一発蹴りをかまされる。

「ツツ……」

少しひるんだが体制を立て直す、間合いを充分とって相手の動きを観察、

アイツとは何度か稽古をつけてやったが前よりも充分強くなっているのは分かる、しかし

あまりにも力不足で、その弱点がありそれをまだアイツは見つけきれていないようだった。

アトロイはそれをすぐさま察知した。

武器を使わず何度か打撃を繰り返す、そしてアトロイはこう言った。

「……オマエ……ヒダリアシガフシヨウシテイルノヲシツテテカカツテキテイルノカ」

「……」

「アマリハナスノハスカン、タダノ（ニエ）ゴトキニカケルコトバ

ナンテナイカラナ」

アトロイは確かに贅を欲し、血を浴び肉を裂きそれを快楽として楽しむ事を生きている糧としている、雇主からはただ

「この剣の欲を満たしてください」としか言われていない、
ただそれだけ、その欲が何かも聞かないで俺はのうのうと付いていたのが悪かった……そのせいで俺はリーリアを……

斧での攻撃を剣で弾き間髪いれずに突き、ぎりぎりのところでグロッドは避けアトロイに話しかける。

「アトロイさん、貴方は何でそんなにこの人間にこだわるんですか」

「ナゼ？ ……クダラヌコトシカキケヌノダナ、コノコワツパメガ」
走って少し距離を置こうとしたがグロッドが付いてきた、少し加速し止まる。

そして剣の握り方を変え、突きの構えにする。しかし突きの構えにしてはおかしな構えだ……

（ツキジャナイ、フシヨウシタアシメガケテケンヲナゲル）

「っ……フンッ……！」

無理な体勢、これで普通投げれるはずなのに投げた……そして左足に刺さる。

「っあ……！！！」

「ニゲロ、ニゲロ……ナゼニゲヌ、ワレノゴラクニツキアエ」

負傷している左足に刺さった剣は毒々しい色に変色し毒を体内に注入する、

「っ……ぐあ……」

「カラダガヤケルヨウナイタミムンジャナイカ？」

「ああああああああ！！！！！」

グロッドは地面を這い俺は笑っている、正式的に言えば俺の体を乗っ取っているアトロイが笑っている。

「クククツ……ワレヲモットタノシマセロ、ゲボク、オマエハワレノオモチャダロウ、モットアガケ、モットクルシメ、モット……モットダ……！！！」

「うぐっ！！！！……がはっ……」

グロッドの腹を蹴り、胸を踏む、足の剣を引き抜き血を薙ぎ払う、グロッドの情けない声だけが響く、血を吐きみつともなくあえぐ事しかできていないらしい、

[illegible]

グロッドの左足を剣で切断する、血が噴出し返り血を浴びる、笑い狂うアトロイ、

左足を両手で押さえつけて止血しようとしているが無駄だ、頭を思い切り蹴り飛ばし手の平が地面につくと同時に踏み潰す、

鈍い音が響く骨の折れる音がはつきりと

「サイコウダ、……ダガマダタリヌ、ワレノヨツキユウハコンナモノデハミタサレヌ」

剣で腕を切断し足の付け根を切断、グロッドの目の前でグロッドの足を刻みこむ、

「ナアコワツパ、コレガオマエアシナンダゾ、コンナニグチャグチヤニナツタラドウニモナラナイナ」

にやりと笑い尻を蹴り飛ばす。

「サツサトシンデシマエ、オマエデハモウタノシメナイ……サラバ
ダオロカナセイネンヨ……」

高々と剣を掲げそれを思い切り振り落とす、

首を撥ねた……

そして満足したのか俺の体からアトロイは消えた……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8388c/>

呼ぶ名前は何処に……

2011年1月7日14時15分発行